

名古屋工業大学男女共同参画推進センター ニュースレター

Vol.4

2016.02

発行 名古屋工業大学男女共同参画推進センター 〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町
TEL | 052-735-5121 URL | <http://www.nitech.ac.jp/gender/>

CONTENTS

1. TOPICS 名古屋市女性活躍推進企業認定・表彰制度に
おいて優秀賞を受賞
2. REPORTS 11～1月の活動報告
3. INTERVIEW 湯地昭夫理事/情報工学専攻武藤敦子助教
4. 本学における研究者支援施策 研究支援員制度
5. WLB 相談室
6. 彩綾-SAYA-だより

TOPICS

名古屋市女性の活躍推進企業認定・表彰制度において優秀賞を受賞

この度、名古屋市による、女性がいきいきと働ける職場づくり
に意欲的な企業を認定する制度である「名古屋市女性の活躍
推進企業認定・表彰制度」において、本学が優秀賞を受賞し、
1月29日の表彰式に参加しました。この制度は、各事業所の
育児、介護休業の取得実施、女性の採用比率、管理職登用の目
標値の有無などの評価により認定・表彰されるものです。今年
度の受賞企業は、優秀賞4社、新規認定企業1社、従業員表彰
1社であり、平成21年度の制度開始からこれまでに累計61
社が認定されています。

本学は、的確な現状把握に基づいて女性を支援する体制が
整っていることと、学長自らが男女平等参画について発信する
など大学全体を通して女性の活躍推進に取り組んでいることが
評価されての受賞となりました。愛知県内の大学としては、平
成24年度に優秀賞を受賞した名古屋大学、名古屋市立大学に
続き3校目、工業大学としては初めて認定を受けました。

表彰式は名古屋市役所で行われ、鵜飼裕之学長と男女共同参
画推進センター長藤岡伸子教授が出席し、表彰状と記念プレ
ートが授与されました。名古屋市長河村たかし氏との懇談の際、



鵜飼裕之学長は、「OG人財バンク」の説明をし、女性研究者
だけでなく、その支援をするOGのキャリア支援にもつながる
ことを話しました。また、河村たかし市長からは、名古屋の女
性活躍推進を牽引してほしいとの期待が述べられました。

【優秀賞】表彰理由

女性数の少ない工業大学ではある
が、的確な現状把握に努め、女性教
員比率目標値の達成のための採用公
募時の女性優先ポリシーや女性研究
者支援のための各種制度など、女性
を支援する体制が整っている。

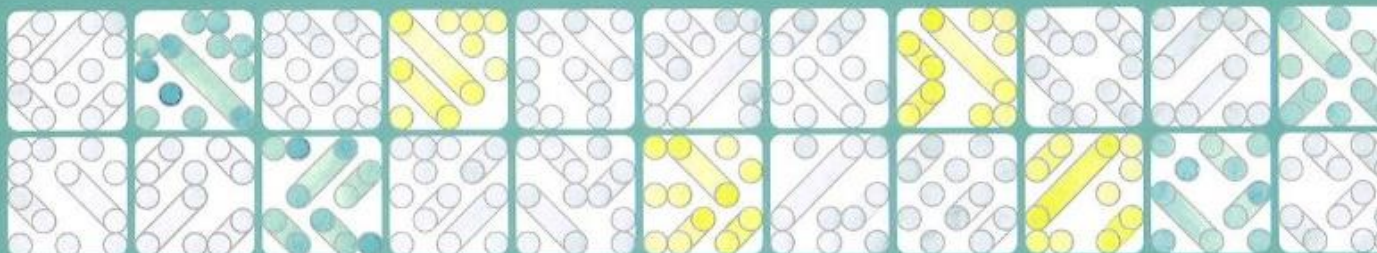
学長自らがあらゆる機会を捉え、
男女平等参画について発信するなど
大学全体を通して取り組んでいる。

認定証・認定マーク



男女共同参画推進
センター長
藤岡伸子 教授

2014年12月に男女共同参画推進セ
ンターが発足し、以来、女性が少な
い工学部の男女共同参画に関する問
題を少しずつ解決すべく、センター
スタッフ一同努力してきました。そ
うした努力を第三者から認めてい
ただいたことは大変うれしいことです。



REPORTS

11～1月の活動報告

11

November

7

オープンキャンパス・女子学生のためのテクノフェスタに参加しました



午前のオープンキャンパスでは、4号館1階の相談コーナーに、約10名の女子高校生と保護者の方が来訪されました。受験勉強や学科選択だけでなく、学校生活に関する質問が寄せられました。

午後のテクノフェスタでは「先輩女子学生からのメッセージ」として彩綾～SAYA～の土屋一三子さん（機械工学科4年）、

酒井優さん（環境材料工学科4年）、香村友美さん（生命・物質工学科3年）が、進学先の選択理由や、勉強やサークル活動など学校生活のこと、就職のことなどを話しました。その後の懇談会では、教員や学生とより近い距離で話す時間になりました。先輩女子学生や先生の話を中心に聞く女子高校生の姿が印象的でした。

12

「女性に対する暴力をなくす運動」に関連する図書の展示を行いました

25

「女性研究者と女性技術者のワークライフバランスの推進」シンポジウムを開催しました



はじめに、キャリアサポートオフィスの山下啓司教授から本学の就職活動の現状や、工学系女子学生への産業界からの期待についてお話があった後に、トヨタ女性技術者育成基金主幹の堀川達弥氏から基金に関して紹介いただきました。

次に、リクルート未来研究所所長の岡崎仁美氏から「近年の女性技術者の就労環境およびワークライフバランスに関して」という演題で、女性が働き続けるためにどのように社会が変化し、職場の環境が変化しているのか、また、ご自身の体験も踏まえ、キャリアパスとワークライフバランスに関して講演いただきました。

その後、岡崎仁美氏のコーディネートの下、本学の研究者である武藤敦子助教と、技術者である株式会社デンソー基礎研究所環境材料研究室長の伊藤みほ氏、本学大学院博士後期課程3年の前野万也香さんによるパネルディスカッションが行われ、研究者・技術者・大学院博士後期課程の学生、それぞれの視点で、進路選択の経緯や仕事観、ワークライフバランスに関してざっくばらんなお話を伺うことができました。

進路選択を控えた女子学生にとって、自身の将来をイメージする貴重な機会となりました。

12

December

16

「女性研究者・技術者の会」のファースト・ミーティングを開催しました



女性研究者と技術者とが連携し、親睦を深めることを目的とした「女性研究者・技術者の会」のファースト・ミーティングを大学内のカフェで行い、15名の女性研究者と技術者が参加しました。

少数派の女性研究者・技術者は同じ大学でありながら、所属が異なるとコミュニケーションを図る機会が少なくながちです。互いに交流を深め、横のつながりを強固にし、いざというときに互いに手を携え、助け合える関係性の構築を目

指すことに本会の主旨の1つがあります。

第一回である今回は鶴飼裕之学長と湯地昭夫理事にもご参加いただき、会の今後の発展と継続に向けて、意欲的に進めてほしいと期待が述べられました。それぞれの研究者・技術者は、昼食をとりながら親睦を深めました。

今後は、定期的に「女性研究者・技術者の会」を開催し、名古屋工業大学の女性研究者・技術者のさらなる発展に向けて、連携することが確認されました。

25

科学英語論文プレゼンテーションセミナーを開催しました



教職員 14 名 学生 30 名が参加し、3 つのセッションに分けた講義が行われました。はじめの「英語口頭発表の基礎と準備」は、英語による口頭発表の心構えやテクニック、講演（口頭発表）と論文（印刷発表）の違いなど、これから英語によるプレゼンテーションをする人にもわかりやすい内容でした。また次の「口頭発表の実践ポイント 1」は、実際のプレゼンテーションの流れにのっとり、決まり文句や図表などの説明の仕方、発音方法など実際の

プレゼンテーションに役立つ内容でした。最後の「英語口頭発表の実践ポイント 2」は、口頭発表終了後の質疑応答の対応の仕方やポスターセッションの際の発表のテクニックに関する内容でした。参加者からは、「日本語と英語のプレゼンテーションでは、スライドの構成などにも大きな違いがあることがわかった」、「実践的な内容で、使える表現がまとめられていてとても参考になった」等の前向きな意見が多数聞かれました。

01
January

13

女性研究者研究活動支援事業（一般型）シンポジウムを開催しました



教職員、学生、一般、あわせて約 100 名が参加しました。

愛知県副知事堀井奈津子氏に「女性が輝く社会をめざして」と題して講演いただきました。ものづくり王国といわれる愛知県でも将来の研究者になる可能性の高い、優秀な工学専攻の女子学生の確保が喫緊の課題であるとされました。

続いて、日本 IBM 理事の我妻三佳氏に「企業における女性のキャリア形成の現状」と題して講演いただきました。IBM で活躍する女性の優れた点として、プロ意識が高く離職率が低いことや女性ならではの感性が武器になっていることなどが挙げられました。また、学生に向けて、時間のある学生の時期こそ、英語力やコ

ミュニケーション能力をつけるなど、勉強する機会だと考え、自分を信じプライドを持って頑張してほしいとメッセージが送られました。

後半のパネルディスカッションでは、本学キャリアサポートオフィス長の山下啓司教授がファシリテーター、情報工学専攻の武藤敦子助教がコメントーターを務めました。パネリストにはトヨタ自動車(株)、トヨタホーム(株)、(株)ノリタケカンパニーリミテド、リンナイ(株)の本学 OG を迎えて活発に意見交換が行われました。ライフイベント期の仕事と家庭生活（育児）の両立に不安があるという女子学生に対し、パネリスト達から「考える前にまずはやってみる」ことを勧められました。

20

出産・育児支援制度に関する説明会を開催しました



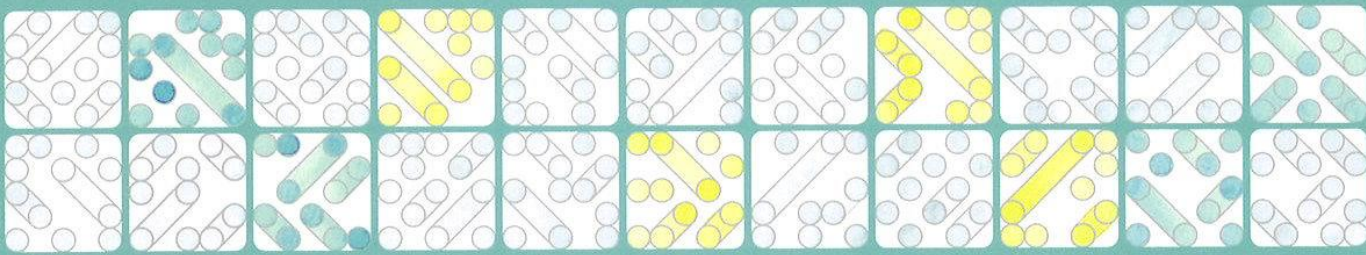
降雪の中職員 7 名の参加がありました。初めに藤岡センター長から自身の育児経験をふまえ、参加者の皆様にはぜひ働き続けてほしいという話がありました。続いて本センター WLB 相談員の菊池より本学の育児制度について理解を深めるだけでなく、育児期女性同士が関わり合い、悩みを相談できる関係性を作ることが重要であり、そのきっかけとしてこの会を利用してほしいという説明がありました。

その後、人事課労務係より制度に関する説明が行われ、活発な質疑応答、参加

者同士の意見交換がありました。ランチ会へは 6 名の参加があり、子供を抱えて働くことに関して出席者同士のディスカッションが行われました。

参加者向け一時保育の利用者は 1 名でしたが、i-cafe 併設のルームに子どもを預け、説明会に集中できていた様子でした。

参加者からは、「今回の説明会でより人事制度に関して理解が深まった」や、「今後、支援制度利用者や育児経験者の話が聞ける座談会を開催してほしい」といった意見がありました。



INTERVIEW 湯地昭夫理事

名工大における女子学生の在学状況について教えてください。

名工大に来て35年がたちましたが、私が所属していた工学化学科・合成化学科(現生命・物質工学科)を見ても女子学生が増えたように思います。35年前は学年に0-2名程度でしたが、今では3割程度。人数が少なかったころは女子学生が居づらかったように思えますね。女性教員も大変少なかったのですが、本年1月からは女性教員が新たに採用されました。女性教員の積極的採用を掲げている一方で、私は増やすことを急いだり、無理したりしてはいけないと思うんです。まずは裾野を広げて女子学生を増やすこと、そして育つのを待つ必要があると思います。

生命・物質工学科は学内でも女子学生の多い学科の一つですが、女性に化学の分野は向いていると思われませんか。

実験中は遅い反応を見届けるために、女子学生も含めて夜遅くまで残っている研究室もあると聞いています。確かに馬力は必要ですが、女性だから向く、向かない、ということはない。化学は化粧品や洗剤など身近な商品につながることで効果が見えやすく、男女に関係なく人気があるといえるのではないのでしょうか。

ご自身のワークライフバランスはいかがでしょう。

我が家における家事負担は50:50です。私自身は親に「上げ膳据え膳」、「男子厨房に入らず」という感じで育てられてきたので、結婚後もそういった生活を想像していたのですが、見事に打ち破られましたね。妻とは大学時代同じ研究室にいたのですが、そこにいた先生の影響が大きいです。その先生は夫婦で研究者だったため、家事は平等に行い、助け合っておられました。その姿を見ていたから自分が家事をするということに対して抵抗がなかったように思います。完璧なロールモデルが身近にいたわけです。今では料理は妻と半分ずつ担当していますし、掃除は私がほぼやっています。今日も私が作ったお弁当を持参してきました。



名工大における女性支援制度についてどのように思われますか。

ライフイベントで大変な時期に、周りが支援することは必要だと思います。でも周りの人は、なかなか大変だということがわからないんですよ。だからマタニティマークみたいに、大変だということが、周りに一目でわかるといいなと思います。そうすれば周りも支援がしやすいですからね。でもそれも難しいので、自分から大変な時は大変だ、と声を上げてもらいたいですね。

インタビューを終えて

周りに支援を求めることについてご自身はどうでしょうか?と伺った際、「実際に自分が大変な立場だったら、周りに助けを求められず、ぎりぎりまで一人で頑張ってしまうのだからなと思います。そういう風に育ってきましたから」とおっしゃったことが印象的でした。周りに助けを求めることは人によってはたやすいことではないと思います。だからこそ支援制度があることを周知し、制度によってキャリアを継続できている実績を作る必要があると思いました。(菊池)

本学における研究者支援施策

研究支援員制度

研究支援員制度は、男女に限らず出産、育児、介護もしくは看護(以下「出産等」という)、出産等以外の生活上の理由のために十分な研究時間が確保できない教員等に配置することで生活と研究業務の両立が図れるように支援していくものです。

研究支援員として雇用できる方は、本学の大学院に在籍する学生、本学の卒業生等としています。

また、研究支援員の勤務形態は、通勤によるものと在宅勤務によるものがあります。在宅勤務による研究支援は、育児・介護等の生活上の理由のために自宅以外での勤務が困難である優秀な研究人材を研究支援員として活用することを目的としています。業務の内容は、データの入力・整理及び加工・資料及び

情報の収集等です。なお、勤務日のうち原則として週に1回以上は、対面により教員の指示を受けていただきます。

この制度を利用可能なのは教員等のうち生活と研究業務の両立が困難であり、以下のいずれかの要件を満たす方です。

- ・妊娠中の者又は産後休暇を承認された者
- ・育児休業等を取得している者
- ・中学校就学の始期に達するまでの子(配偶者の子を含む)を主として養育する者
- ・介護休業等を取得している者
- ・介護保険法で規定する要支援者がいる者
- ・家族のうち看護を必要とする者を主として看護する者
- ・女性の教員等(教授を除く)で、生活上の理由により特に研究業務の支援を必要とする者

INTERVIEW

情報工学専攻 武藤敦子助教

武藤先生の研究内容を教えてください。

情報技術を用いて生物学や社会学への貢献を目指した研究をしています。具体的には出席打刻システムを使った大学生の友人ネットワーク分析などです。シミュレーションし、データを分析しながら検証する研究なので、コンピュータ上の結果が現実的だった時、反対に思いがけない発見があった時、成果が目に見えたときに喜びを感じます。この研究分野を選んだ理由の一つに、コンピュータを扱う仕事に就けば、将来的に在宅勤務も可能で、出産・子育てなどと並行して仕事を長く続けられると思った、ということもあります。

出産前後で働き方にどのような変化がありましたか。

出産前は研究を思う存分できましたが、現在は子供のお迎えの時間までには帰宅しなければなりません。作業の途中であっても時間が来たら中断しなければならないですし、その結果として周りに負担をかけていることや、研究成果に影響していることを心苦しく思うこともあります。でも育休期間を経て復職してからのほうが、効率的に研究を行うよう常に考えるようになり、また集中して研究するようになっ

たので、研究密度は上がったと思います。

出産後どのような工夫をするようになりましたか。

(前述のとおり)時間が来たらきりが悪くても、作業を中断して帰らなければなりません。最初はそれをつらいと思いましたが、作業をやめる際に、次回やることをメモ書きすることにより、翌日すぐに作業を再開できるようになりました。またメモを取るにより、作業内容を整理できるようにもなりました。



研究支援員制度利用者第一号ですね。

この制度をつかえたことはラッキーでした。研究支援員の坂田さんには研究補助をやってもらっていますが、自分が休まなければならないときも作業が進んでいることが安心につながっています。

最後に名工大の学生にメッセージをお願いします。

男子学生にとって、ライフイベントが仕事に及ぼす影響ということはなかなかイメージしにくいかもしれません。でも結婚した相手にもその人の人生があるということを忘れず、ぜひ一緒に考えてもらいたいです。女子学生に対しては、自分の意思を大切にしてもらいたいです。ライフイベントを乗り越えながら、働き続けるには、周りにわかってもらうための努力も必要かもしれません。

インタビューを終えて

「どうしてもこの仕事を辞めたくないと思ったんです。そのために実家の近くに住むことにし、周りの理解を得られるよう、努力してきました」とおっしゃった先生の姿がとても印象的でした。子供を育てながら働くことは、精神的にも、肉体的にも大変なことだと思います。好きなだけでは仕事は続けられない。続けるためにはそれ相応の努力が必要だと思います。でも努力をしても続けたいと思える仕事ができる武藤先生をうらやましくも思いました。(菊池)

研究支援員 坂田美和さん



1998年知能情報システム学科卒業。一般企業にてプログラマーとして勤務の後、退職し、育児に専念。2014年12月より研究支援員として勤務。

研究支援員として働き始めてから、大学と勤めていた企業との環境の差を強く感じている点は、時間についても思考についても、よりフレキシブルであるということです。これ

は、家庭をもった後も意欲的に働くことを可能にするための重要な要素だと私は感じています。働くことの厳しさに変わりはありませんが、自由な発想が受け入れられ、より自分らしくいられる職場で働いていることを幸福に感じています。この機会に感謝し、スキルアップに努めるとともに、経験を広い視野として活かしながら、先生方の研究に貢献していきたいです。

坂田さんの1日

6:30 起床	7:30 長女(小学校)見送り
8:30 長男(幼稚園)送り	9:30 出勤 サーベイ(論文・研究題材など)
12:00 昼休み	13:00 データ分析
14:30 退勤	家事、習い事の送り、家族の頼まれ事など...
16:30 長男(幼稚園)迎え	17:00 帰宅・子どものフォロー (宿題・手紙の閲覧など...)
19:00 夕食準備	20:00 夕食
21:00 お風呂	22:00 就寝

WLB 相談室

ワークライフバランスという「女性が家庭と仕事を両立すること」と思われがちですが、「老若男女誰もが、仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発など、様々な活動について、自ら希望するバランスで展開できる状態」と定義されています。つまり子供の有無にかかわらず、誰もが必要なことなのです。みなさんのワークライフ balan は、いかがでしょうか。今回は、育児休業制度を利用した人事課職員清水亮さんにお話を伺いました。



清水 亮さん
(人事課 人事係)

2015年8月に妻が第二子を出産。10月より3ヶ月間育児休業を取得し、2016年1月より職場復帰。

育児休業を取得しようと思った理由を教えてください。

育児休業を取得した経験のある男性上司の下で働いていた時に取得を勧められていたので、妻が2人目の出産の際には取得したいと思っていました。

また、妻が産後1か月で実家から戻ってくることに決めたため、少しでも妻の体を休められるように、上の子供の保育園の送迎や家事全般を私が担おうと思いました。そうすると、保育園の預け入れの時間に制約(8:00-16:00)

があるので、部分休業や時短勤務では対応できず、育児休業を取得することにしました。

育児休業の期間を3ヶ月にした理由を教えてください。

今回は1人目の時ほど妻の実家の協力を得られる状況ではなかったことと、上の子供の保育園行事に参加させる為に戻ってくるのに合わせて10月から取得を開始し、年度末に向けて繁忙期に入る1月に復帰することにしました。

育児休業を取得していかがでしたか。

妻も妻の両親も喜んでくれましたし、妻の体調のことだけではなく、上の子供のことを考えても良かったと思います。職場も家庭も周りが快く受け入れてくれる環境だったので、恵まれていましたね。

職場の反応はどのようなものでしたか。

妻の妊娠初期につわりがひどく、残業時間を調節していたこともあり、予定日

が近づくとうかがわれてくれたので、言い出しやすかったです。3ヶ月前には上司に取得の意思を伝え、2ヶ月前から引継ぎをしていました。

今後育児休業の取得を検討している男性職員にアドバイスをお願いします。

人それぞれ状況が違うと思いますので、全員が取得するべきだとは思いませんが、取得を考えているならばぜひ取るといいと思います。実際に帰宅が遅くなっても、家でやるべきことは変わらないので、子供のお風呂の時間や寝かしつけにしわ寄せがきてしまいます。事前に上司とコミュニケーションを取り、残業時間を調整したり、自分なりに生産性を上げて頑張ったりもできますが、それではどうしてもカバーできないことも出て来ると思います。

そうした時に、育児休業などの制度を利用するののも一つの手段だと思います。

ニッセイが男性の育児休業を原則義務付けましたが(日本経済新聞 2013/6/24)、男性の育休取得を促す狙いの1つに「職場の女性への理解を深めること」をあげているそうです。育休を取得した男性への調査では「子育て中の女性の急な休みを理解できるようになった」「計画的に業務を進め、組織内で連携がとれれば休めるとわかった」「効率的に働き、早く帰ることを意識するようになった」などの感想があり、男性の育休取得は、長時間労働が当然だった日本人の働き方を変える可能性も秘めているといえます。男性が育児支援制度を使うことについてはまだまだ発展途上の日本において、制度を使うことをためらわれる方もおられるかと思えます。しかし育児制度を利用することは本人やそのご家族のためだけではなく、仕事や職場にも良い影響を及ぼしています。

今後名工大においても、より多くの男性が育児支援制度を活用し、活躍して下さるといいですね。



WLB 相談員
野池美由紀

発行 名古屋工業大学男女共同参画推進センター

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町 TEL|052-735-5121

URL|<http://www.nitech.ac.jp/gender/> E-MAIL|danjokyodo@adm.nitech.ac.jp

彩綾～SAYA～だより

トヨタ女性技術者育成基金の受給者交流会を開催



12月17日にi-cafe(11号館3階)でトヨタ女性技術者育成基金の受給者交流会が開催されました。「トヨタ女性技術者育成基金」とはトヨタグループ

10社が行っている理系女子学生向けの奨学金制度です。今回、初めての交流会の開催でしたが、名工大だけでなく、南山大学、名城大学などから16名が参加しました。

当日は「ライフサイクルゲーム」という企画をしました。ライフサイクルゲームとは、すごろくのコマをより現実的にしたもの。大学院に進むか、どこに就職するか、結婚はするのかなど、これから受給者が「リケジョ」として経験するであろう出来事をテーマとし彩綾オリジナルのものを作成しました。ライフサイクルゲームを通し、交流会に参加した受給者は、将来迷う事になる選択肢や悩みについて考えることができたのではないかと思います。

参加者からは他大学の受給者と楽しく交流ができ、身近な将来について考える良い機会になったとの声がありました。来年度はさらに多くの人に満足してもらえる交流会を企画していきたいと思えます!(生命・物質工学科1年上田和美)